

「山名・地名」異聞抄

言葉・言語は人間あつての生命だけれど、だからといってひとが勝手に創ったり改変したりはできません。論理や合理主義の手袋をはめ、言葉を捕らえようとしても、彼らは伸ばした指先の隙間から、するりと逃れ去ってゆく。とりわけわが国は〈言靈(ことたま)の幸(は)ふ国(は)〉(『万葉集』)ですから、言ことの葉はのそよぎかたも玄妙で、ひとの思惑など知らぬげに、言葉たちは自由気儘に遊んでいる。

言葉あやつって妻子犬猫につましい食をあてがう私も、じつのところは「私」の主体なんぞどこにあるのかあやしいもので、もっぱら言靈に使役される歩荷ほっかのごとき存在である。そう、私に思惟思想などがあるとしたら、それは言靈ほしままの恣ほしままに訪れたのち、うすぼんやりと形をなすにすぎません。

言葉・言語の自律性、人間に対する優位をことほどさように信じてはいるものの、ときおり、これでいいのかしら、と疑念を覚えるような言葉もある。ことに、固有名

詞について。

ここでは、あまり由緒正しくない山名地名がそのまま定着してしまった例を、少しばかり挙げてみましょう。これはやっぱりマズイよと思つたものもあるし、これでもいいのだ、と納得できたものもある。もつとも、私は言語学や民俗学の徒ではない。すべては先学・先達の受け売りです。

瑞牆山かコブ岩か

詩人尾崎喜八に「秩父の王子」と称された原全教。その秩父の王子が憤慨しています。土地の人が昔からコブ岩と呼んでいるのに、へ地図に瑞牆山(みずがき)などあるのは、何代か前の県知事武田某の気まぐれな神がよりな多くの悪名の一つである（原全教筆『山と溪谷』一九四七年七月号）。

武田某とは第十六代山梨県知事武田千代三郎ですが、奥秩父とその麓の住民をこよなく愛した原全教が、権威でもって手前勝手に「命名」などした県知事殿に反感を抱くのは当然でしょう。瑞牆山と記すたびに辞書を引かねばならぬ私としても、地元の呼称コブ岩だったらずいぶん楽だ。

しかしながら、漢字を写したついでに辞書を読んでもみると、あんがい気分のよいこ

とが書いてあった。「瑞」とはそもそも「めでたい」という謂であるし、「瑞籬」とは神社のかきね、玉垣とあり（『大辞林』）、「牆」は境界、土塀とあり（『漢語林』）、「瑞垣」は神霊の宿る山・森などの周囲に木をめぐらした垣などとあった（『広辞苑』）。これはあの荘厳なる岩塊、修験の岩山にぴったりの名前ではあるまいか。心情的には秩父の王子に共鳴したいところだが、どうもコブ岩よりは瑞牆山のほうに軍配を揚げたくありません。それかあらぬか、本来の呼称を踏襲する者は地元にもいなくなり、いまはかつきり瑞牆山は瑞牆山。

ところで、おおよつと、辞書を見ないで瑞牆と書けるようになった。おせっかいだが、この苦勞と悦びがワープロ・パソコン常用者にはないね。おそらくは識字力も低下する。便利になると、そのぶん人間本然の能力は衰える。登山者たち——車で行ける山に、大汗かいて歩いたり攀じ登ったりするへんな人種も、機械文明による人類退化の、かすかな歯止めにならぬともかぎらない。

ハクバ岳かシロウマ岳か

大系線の駅名白馬は、もうどうしようもなくハクバでしようが、白馬岳しろうまをハクバ岳と呼んでこう説教されたひとはいませんか。白馬は雪形の代馬しろうまが転じたもので、ゆえ

にシロウマと訓まねばならぬ、と。私もずっとそう信じていましたが、三井嘉雄著『黎明の北アルプス』（一九八三年、岳書房^{スプリ}）に、かくのごとくあった。

雪形から代馬岳といわれるようになったはずの白馬岳は、そういう解釈のできる文献には一つも出会うことがなく、反対に、それらを否定する材料ばかりがあつまってしまうのであった。

三井氏は明治、大正の文献を博搜して興味尽きないが、要約させていただく、白馬岳とは本来一ピークの名ではなく、そのあたりの連嶺の信州側の呼称であった。今の白馬岳ピークの特定は三角点の選定が行なわれた一八九三（明治二十六）年、その三角点名が五万図に（シロムマダケ）のルビ入りで白馬岳と記されたのが一九一三年であった。などとあり、（雪形から白馬岳の名がついたと考えるのは、うがちすぎである）と結論している。

さらに、シロウマかハクバかだけれど、三井氏の挙げた文献中最古の『信濃国地誌略』下巻（一八八〇年）には白馬にハクバと読みが振ってあるそうだし、W・ウエストンの『極東の遊歩場』（原典一九一八年）にもこんなことが書いてあった。

この山は、北側の越中エツチユの人々には大蓮華と言われているが、南側の信州の人々は白馬岳シロウマとか白馬山ハクバサンと呼んでいる。(岡村精一訳、一九七〇年、山と溪谷社)

ウエストンが最初に白馬に登ったのは一八九四年で、このときはオーレンゲ(越中側の呼称)と記しているのみだが、一九一三年に再登した際の紀行に右の記述があるのです。眼病に悩んだウエストンだが、耳はよかったのだろう。アルピニズムの宗家としてのみならず、民俗学徒ウエストンにも、敬意を表さねばなりません。ともあれ、ウエストンの以前から、白馬はシロウマともハクバとも呼ばれていたわけで、現代のわれわれがハクバと称したところで、先輩方から咎とがめられるいわれは、どうやらなさそうなんですよ。

源次郎尾根か源治郎尾根か

劔(初期の『山岳』など)、劔(二万五千図)、劔(『山と溪谷』など)の用例もあるが、ひと昔くらい前、地元では劔に決めたらしく、以来新聞でもだいたい劔を使っているようです。いずれにせよたいした根拠はなさそうだし、同じ字のヴァリエーションな

んだから、まあこれはどっちでもよい。ここではとりあえず劔と書くことにします。さて、その劔岳東面の大岩稜、源治（次）郎尾根の話。

現在流布しているガイドブックの類にはたいいてい源治郎尾根と記されているが、結論から述べると、こいつは源次郎尾根が正解らしい。ハナからずっと源治郎で通っているなら、たとえ誤用であっても、言の葉の玄妙な作用による「誤用の真実」(?)としてあるいは認めてもよろしいが(日本的・東洋的心性)、地元の佐伯邦夫氏の著作や一時期の『岳人』は源次郎で表記しており、そもそも人名なのですから間違いと判ったのに知らん顔をするのは失礼なんじゃないかしら。以下は『岳人』(一九七〇年二月号)に載った湯口康夫氏の論考を基にしたもの。

源次郎尾根(もうこう書いてしまいます)の下部からの初登攀は一九二五(大正十四)年七月九日、三高の今西錦司、渡辺漸および案内人佐伯政吉によって成された。渡辺は『山岳』第二一年第一号(一九二七年六月)に「劔岳新登路と八ツ峯」と題して詳細な報告を載せています。この新登路というのが源次郎尾根のだが、原文より引く。

その源治郎尾根と称する所以は、大正十三年七月別山平に新設された登山小屋の建設に従事した大工源治郎なる者の名前を取ったからである。(傍点は遠藤)

以下、渡辺稿の要旨概略。一九二四年夏、小屋（現劔沢小屋の前身）を造っていた芦峯寺の大工源治郎が、ある日ふと思いたって劔の天辺を極めようと通常コースの平蔵谷に入ったが、路を誤り凶らずもこの尾根の上部を登ってしまった。源さんの採ったルートは一九一五年七月、すでに冠松次郎らが降りている容易な路だし、自分たちこそ下部から初めて登った者なのだが、ここはひとつ、地元の民源治郎の名をこの尾根に冠するのが、穏当というものであろう。

渡辺の報告は二十六頁に及ぶ力作で、以降の劔岳研究の基本文献となったから、源治郎は根強く今日に至るまでハバを利かしているのです。ところが、前記湯口氏の丹念な調査によって、源治郎は源次郎のたんなる間違いであることが確定的になった。

まず、源治郎は戸籍上も実在しないこと。一九二四年にこの尾根の上部を登ったゲンジローは実在するが、大工ではなく、小屋の建造の現場を采配していた、いわば「人夫頭」であったこと。そしてこのゲンジローと呼ばれた男の本名は佐伯源之助（一八七五—一九四八）であること。源之助の祖父および長男は源次郎であること。

まるでパズルみたいですが、訳を知ればかんたん。湯口稿は系図まで見せてくれるが、「源次郎」というのはこの一族の由緒正しき屋号であり、村の衆や近隣の者はお

たがいを呼ぶのに本名でなく、屋号で呼ぶのがふつうであったというのである。すなわち、ゲンジローは源之助、源之助は源次郎。源次郎の入り込む余地はありません。

湯口氏は源之助の次男政光にもインタビュールしている。源之助＝源次郎は劔沢小屋のほか弘法小屋、五色ヶ原の小屋などいくつもの小屋を手掛けた優秀な現場監督、立山一円をわが庭とするような生粋の山人だったそうです。彼の通り名が劔岳の一部に残ったのは幸いだった。ただし、源治郎はもうやめようよ。ガイドブック製作者各位、御一考をお願いします。

もうひとつ疑問があるね。初登攀時、三高ペアと行をともにした佐伯政吉の名が、なぜに冠されなかったか。政吉尾根でもよさそうなものではないか。これは渡辺の報告を読むと判ります。かつては優秀な案内であった政吉も、当時は齢をとりすぎてガイドの役に立たず、彼らは政吉を初登攀の証人として、文字通り伴われていただけだったからです。

なお、本稿の初出後『山岳』第九五年（二〇〇一年十二月）に五十嶋一晃という方がもっと詳しい研究論文を書いていて、「源次郎」説の正しさをあらためて立証しています。

*

わずかな例を挙げたが、山名地名の誤謬不適切はじつはゴマンとあるでしょう。槍ヶ岳千丈沢は百瀬慎太郎に言わすと千丁沢が正しい（冠松次郎筆『山と溪谷』一九五九年八月号）、後立山の不帰ノ嶮（かろす）（けん）を不帰岳と記してしまつてすみません（恩田善雄筆『岳人』一九六二年八月号）、いや恩田さん、古地図によるとあれは不帰岳でもいいんです（広瀬誠筆『岳人』一九六二年九月号）などなど……。

地名の考証は奥が深い。門外漢が首を突っ込むのはおそろしいが、ついつい嵌はまつてしまいます。けれどぼくらがどんなにやきもきしたところで、言の葉は勝手にそよぎ、時間ときと手を携えて、やっぱり、自由気儘に遊んでいる。